哲学とアートのための12の対話――『現代』を問う

第1回：考える＝迷子になる

2023年5月13日（土）14:00 京都芸術センター大広間

○ 室井尚さんからのメッセージ

【「迷わない」1990年代以降への苛立ち】

....僕はやっぱり、アートはすごくつまらないんだけど、アートだけがつまらないかというと、みんなつまんないんですよ。思想も９０年代は何も面白くない――面白くないって言っていると、じゃあお前はどうなんだということになるわけだ。そうすると、何でつまんないのかということを考えなくてはいけない。それで、そのつまらなさというのは、‥‥公園の中では自由に遊んでいいよと言われている子供のような不自由さがあってね、全部フレームが決まっているわけです。左翼でさえ、革命を起こすとか**ブルジョア**を皆殺しにしろとかもはや言わない。今の**カルスタ系**の人たちが言っているのは、抑圧されたマイノリティの人たちの権利を高めましょうとか、みんなに発言権を与えていきましょうとか言ってるわけですよね。
（藤幡正樹との対談「メディア・メタモルフォーシス」、日本記号学会編『記号学研究』22、2001）

【〈考える＝迷う〉ことへの誘惑】

....本書の場合この地図〔叢書名「ワードマップ」の「マップを指して言っている〕は読者を無限の迷路にひきずりこむような、奇怪な項目で占められている。そればかりではない。ページをめくれば、そこには一見とりとめもない対話やらＳＦのような奇妙なフィクションやらが書き込まれているのである。各項目の見出しもキーワードというよりもほとんど見慣れない奇妙な言葉で埋められている。一体これは何なんだ？といぶかったり、あるいは怒りだしてしまう人がいても不思議はない。タイトルに興味を抱いてこの本を買ったのに、有用な情報を与えてくれるどころか、ますます頭が混乱してしまうばかりではないかと思われる方もいらっしゃるかもしれない。
....「情報は宇宙である」。これは、その真偽を「客観的に」決定できるような命題ではない。そうではなく、それは選びとられたひとつの「視点」なのだ。ぼくたちは「情報」という概念を、日常言語のなかでそれが閉じ込められていた領域から拡張し、「生命」「意識」「身体」「自然」といった領域へと接合していった。これに対して、**情報概念**の無責任な濫用という批判を受けるであろうことは当然覚悟の上のことである。だが、問題はそうした視点を採用することによって、これまでとは違った形で世界を捉え直すことが可能になる、ということなのである。（『情報と生命』序文、1993）

【真理と説得】

〔フロイトの説明は〕経験に合致している説明なのではなく容認されてしまう説明なのである。諸君は容認されるような説明を与えなければならない。これこそ、説明ということの全眼目なのである。（**ウィトゲンシュタイン**）

....「本当はこうなのだ」という説明は、それが何かしら隠されていた真理の「発見」であるとか、世界と正しく〈対応〉しているとかの理由で承認されるのではない。そうではなく、それは単に「説得」の問題なのであって、ちがったやり方をすれば、それはまたちがった形で容認されることがある、とかれ（ウィトゲンシュタイン）は言っているのである。**精神分析**が治療において何らかの成果をあげるとしても、それはフロイトが神経症の「本当の原因」を発見したからではなく、われわれに容認させる「理由を見つけ、そのことを説得したからにほかならないのだ。（「説得と争異」『メディアの戦争機械』1988）

対話のためのワード~~マップ~~

※ブルジョア

　現代日本語の「ブルジョア」（または「ブルジョワ」）は漠然と「お金持ち」的なニュアンスを持つ言葉だが、もともとは「有産階級」（または「中流階級」）、つまり特権的な上流階級（貴族など）と労働者階級との中間にある「ブルジョワジー（bourgeoisie, middle class）」という概念があり、ブルジョアとはそれに属する個人のこと。社会主義／共産主義革命の文脈では、労働者を搾取する資本家という意味が強くなり、そこから文中で言われているような、「ブルジョアを皆殺しにせよ」という左翼過激派的な主張が出てくる。

※カルスタ系

　「カルスタ」とは「カルチュラル・スタディーズ（cultural studies）」の日本語的な略称。「カルチュラル・スタディーズ」とは20世紀後半のイギリスに発し、マルクス主義の影響を受けながら性的・民族的・人種的・社会的なマイノリティーの文化に着目し、「学問的権威」の上から目線ではなく、むしろ対象への共感やコミットメント――研究者自身がマイノリティに属する場合も多い――を持って行われる研究で、支配的文化基準に対する抵抗的意識を持つ。サブカルチャーなど従来は学問的対象とみなされなかった領域に研究活動を拡張した功績は大きい反面、方法論や理論的文脈が多種多様でタコツボ化・オタク化する傾向があり、科学的正統性という立場からは厳しく批判されてきた（「サイエンス・ウォーズ」など）。「ポリティカル・コレクトネス」を「ポリコレ」と略す場合と同様、「カルスタ」という言い方はやや軽蔑的なニュアンスを伴う。「系」はこの場合は俗語で「（「カルスタ」とハッキリ自称しないけど）漠然とその傾向に属している」という意味。その前に「今の」とあるのは2000年当時「カルスタ系」が現代思想の意匠として流行していたことを示す。（現在では流行ではなくなり、ある程度制度化されている。）

※情報概念

　通信理論や情報科学における「情報」の数理的な定義からすれば、室井さんの主張してきた「情報は宇宙である」のような命題は情報という概念の恣意的な拡張として批判されるかもしれないが、1990-2000年代の室井さん（や吉岡）は、それを知りつつあえて世界を情報として理解することの重要性を主張してきた。‥‥ところで最近、かつては奇妙さやパラドクスばかりが強調されてきた量子力学的世界解釈について、パラドクスに見えるのは実在する宇宙との対応という古い観念にとらわれているせいで、宇宙はすべて情報なのだと解釈すればスッキリ理解できるという主張が現れてきた（例えば堀田昌寛『入門 現代の量子力学』KS物理専門書 2021年）のはとても面白いと思う。

※ウィトゲンシュタイン

　室井さんや吉岡がこれまで刺激を受け続けてきた哲学者の一人。ところでウィトゲンシュタインも、しばしばその論理的パラドクスばかりが注目されるが、真理ではなく説得というこの主張は、「宇宙は情報である」という立場から見れば別に不思議なことではなく、現実的・合理的でプラグマティックな態度である。

※精神分析

　フロイトの精神分析がそうした「説得」を示す例としてここでは取り上げられているが、それはウィトゲンシュタインの活躍した同時代（1920-40年代）に、精神分析が流行すると同時に物議を醸し、常に論争の的となっていたからである。精神分析は20世紀の前半から1960年代頃まで、哲学や文学・芸術ばかりではなく、その大衆文化的な影響（マリリン・モンローの映画など）も含めて全世界的に絶大な影響を及ぼした。だが現在では、精神分析は学問的な正統性を疑われて大学からも追放され、影響力も限られている。これはウィトゲンシュタイン的な文脈からすれば進歩ではなく、反対に「説得」から（実在との対応としての）「真理」への退行であり、1990年代以降の現代文化が、せっかく切り開かれた哲学的思考の可能性を封印してしまったことのあらわれである。

コメント用　QRコード

・ご質問、ご感想などがあれば、WEB上でご記入ください。
（次回講座等で匿名でご紹介させていただく場合がありますので、
ご了解ください。）

https://forms.gle/X7vcXNmajRkG2TXL9